



## 有限会社マルミヤコーポレーション

住所 岐阜市東改田腰前田 95  
TEL 058-239-0616  
FAX 058-293-0235

～時代の変化に合わせた庭の提案を～

# 世界に一つだけの庭造り

創業は昭和二十二年。岐阜市東改田にある有限会社マルミヤコーポレーションは造園業をはじめ、外構工事、グリーンリースなどを扱っており、まもなく八十周年を迎えます。今回は三代目の堀義崇さんに、これまでの歩みとこれからの夢をお伺いしました。

有限会社マルミヤコーポレーション

代表取締役 **堀 義崇**さん



## 「観葉植物」という 呼び名の生みの親

マルミヤコーポレーションは、初代の堀義吉さんが昭和二十二年に創業しました。義吉さんはかつて、紡績工場で温室係として働いており、観葉植物の栽培を手掛けていました。その知識を生かし、創業後は花をはじめ、当時は珍しい植物の販売やリースを始めました。

「当社が珍しい観葉植物を多く取り扱うことができたのは、昭和三十年代に観葉植物のパイオニアと呼ばれる瀬川弥太郎氏と祖父が連れ立って日本だけでなく、世界を飛び回り多くの有用植物を収集して繁殖したからだそうです。その頃の観葉植物は自分で株分けの作業が必要でした。実は『観葉植物』という言葉も二人の間に生まれた言葉だと聞いています」

そう語るのには、三代目の義崇さん四十三歳。平成十五年、社長に就任し、はや二十年が経ちました。

## 跡を継ぐために

義崇さんが跡を継ぐことを決めたのはなんと小学二年生の時でした。「早いですね。先代である父の清吉が急逝したため、継ぐか継が

一緒に作り上げていく作業は、当時の私にとって大きな力をつけることが出来た貴重な学びの時間でした」

この実績により、トータルコーディネートを任せられると周知され、岐阜市内問わず県外からも注文が入るようになり、事業は順調にまわり始めました。

「すべてはおお客様の笑顔のために」という義崇さんの想いの下、現在は直接お客様の笑顔を見ることが出来る個人向けの「家族がくつろげるお庭づくり」の事業も進め、緑を中心にした豊かな生活をお客様に届けています。

## 二つの夢

義崇さんにはいずれは造園業の職人を育てる学校を作りたい、という夢を持っています。

「多くの新人は現場に出て、すぐには戦力にはいきません。現場に出て初めて基本的なことから覚えるのです。しかし、雇用側は人手不足ということもあり、すぐに戦力として求めてしまいます。そうなるとう出来ない業務を任せられ新人は、それに応えることが出来ず離職という残念な結果に繋がる

ことが少なくありません」  
すぐに仕事を任せたい雇用側と、出来ない仕事を任せられてしまう被

雇用者に生じる隔たり。これを埋めたいと思う方策が「学校」だと辿り着きました。  
「昔は、時間や余裕があるなら新人を現場へ連れていき作業を学ぶ機会を与えられました。最近では、あらかじめ登録している職人しか連れていきません。それは、怪我など万が一の時のための対策が厳しくなったため、仕方のないことです」

臨機応変な対応も難しくなっている現代に、造園業の職人を育てる学校があれば、現場に出てから初めて覚えることが少なく済みます。『現場に出始めたばかりでも出来ることが沢山あれば自信とやる気に繋がるのではないか』と義崇さんは考えます。そしてその積み重ねが、造園業という産業を守っていくためには重要だと考えています。

「造園に対するニーズはなくならないと思います。安らぎとして大切だからです。そのためにも職人を育てる環境はとても重要です」  
そしてもう一つの夢が日本庭園を海外で手掛けることです。

「結婚式場とホテルの外構工事を手掛けることも目標でしたが、それは叶えることが出来ませんでした。あ

ないかその場で選択を迫られました。もともとプラモデルなど物を作るのが好きでしたし、職人の仕事に興味もありましたので、その場で継ぎます、と答えました」  
高校卒業後は植木の産地で有名な宝塚市で四年間修行に励みました。修行に出ることは、覚悟して臨んだものの職人としての修行は大変な毎日でした。三年が経ったころ、義崇さんは壁にぶつかりました。

「職人の技を、短時間で全てを習得することは、私には難しいと感じる日々が続きました。しかし、それをきっかけに作業の段取りをはじめ職人の仕事を含めた『経営者』の立場に立った勉強に切り替えることが出来ました」

そこからは、新たな勉強が始まりました。  
「修行先では観葉植物のリースの取り扱いもしていたので、一年間はリースに特化して勉強しました。祖父が始めた造園業と父が大切にしていたリース業を両方手掛けたいという思いがますます強くなりました」

そしてようやく二十二歳の時に岐阜に戻り跡を継ぎましたが、義崇さんを待っていた現実は思い描いていたものとは違っていました。「私と考えが合わず辞めていった職人もいました。今なら話し合う

沖繩へ行き、要望通りの木を見つけてのために奮闘したこともありました。そんな頃、同時にあといつ描いた夢が、いつか日本庭園を外国に造ることでした。残念なことには最近国内で日本庭園を造る機会が少なくなっています。日本庭園のすばらしさを発信するためにいつか海外で手掛けられることができれば、と思っています」

庭は、ひとりひとり、ひとつひとつ、その人のその空間の個性という「色」を描いていきます。お客様の「色」と笑顔のため、義崇さんはこれからも造園業に力を注いでいきます。

\*有用植物：食料、衣料、燃料、などに用いられる衣食住において人間生活に役立った植物

術も分かりますが、当時はまだ若く、そのような余裕はありませんでした。仕事も無く毎日何十件も一人で営業に歩き回りました」  
そんな義崇さんに転機が訪れます。二十六歳の時、大手外食チェーンから外観のトータルコーディネートに依頼されたのです。

当時、その大手外食チェーンは店舗ごとに植物を取り入れた独自の外観づくりに力を入れていました。  
「外構工事と緑を同時に扱う会社だからこそと声を掛けてもらえた。その期待に応えたく、各店舗の要望を細かく拾い、コンセプトを大事にトータルコーディネートしました。高いレベルの要求や短時間での提案書の制作、その外観づくりなど、先方の設計士と一

